



新四国相馬靈場八十八ヶ所巡り

取手西部、岡と下高井地域



Photo Reiko.T 2004/05

2022年11月27日実施

三仏堂三尊、釈迦如来、阿弥陀如来、弥勒菩薩



URL: <http://88souma.com/>

法海寺観音堂に居られていた頃の寝釈迦像写真
グラマーな取手の寝釈迦 (作者不詳)



第69番札所の寝釈迦像は、足元の両足が揃って身体と直線状に伸びていて、他の寝釈迦像と違う造形をしています。

通常の寝釈迦の場合は、仏足(ぶつそく)という足の裏の紋様が見られ涅槃像の特徴でもあります。

また、目が閉じているので死後なのですが、手枕(たまくら)していますネ。

下高井の広瀬家の勝海舟の書



独(ひとり)其(その)志(し)を(を)養(や)う

明治 20 年初春 廣瀬氏の囑(頼み) 勝海舟、勝海舟日記に「人見一人同道」とある？

小貝川河川敷での神旗争奪戦

「相馬野馬追合戦」奥州南相馬の騎馬合戦は全国的に知られた行事で毎年7月に行われています。

下総相馬では行っていません。写真は昭和48年、藤代町の小貝川河川敷で行われた神旗争奪戦の様子です、人馬ともに南相馬から呼んだとか・・・。

元亨3年(1323)相馬重胤は、相馬郡流山から奥州行方郡に移りました。下総国相馬を懐かしむ郷愁は平将門が行った軍馬訓練でした。

取手の駒場台は野生馬の調教場であったとか。



新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会、

「取手西、岡と下高井地域」

集合場所時間…常総線稲戸井駅午前8時半、
解散予定…常総線寺原駅午後12時半の予定。

桔梗塚、 該当場所が狭いため立ち寄りません

将門は承平元年(931)長禅寺落慶式で桔梗に出合
う。愛妾桔梗の前は将門の死を知り、後を追いつ自殺
場所の三仏堂を目指しますが、追手に切られてしま
う。桔梗御前は丁重に此処に葬られた云います。

この辺りには将門についての言い伝えが多く、桔
梗御前については様々の伝説があります。

桔梗は秀郷の妹(事実ではない)であり将門の愛妾
となったが、戦が始まってから将門側についたとい
う、桔梗は兄秀郷に言葉たくみに騙されて情報を提
供したという。

秀郷はこれにより勝利を得たが、この事が暴露さ
れると後世まで非難されると考え、この場所で桔梗
を殺害したと言う。里人は大いに哀れみ、塚を築い
て遺骨を納めたと言う説です。この話は逸話です。

さらに、桔梗御前は将門と共に岡堰の朝日御殿に
住み、将門の死を聞いて近くの沼に入水して没した
とも云われています、現在桔梗田と言われ相野谷川
沿いに野良地として残されています。

桔梗の入水自殺を憐れみ郷の人々が桔梗の塚をこ
こに建てたという話もあります。

其処に植えられた桔梗に花が咲かなかったので、
この辺りでは「桔梗は植えない、娘がいつまでも嫁
に行けなくなるから。」と伝えられてきました。

花が咲かない桔梗は菓草種であり、あえて花をつ

けないように栽培されました。

菓草として妙薬である為に、菓売りの宣伝話とし
て創作したものと伝わっています。

また、利根川図誌に、小宰相(こさいししょう)とい
う愛妾が登場するが嘉応元年(1056)〜寿永三年(1184)
将門と年代が一致しない。平通盛の妻の様です。

桔梗塚は、常総線や国道294号により、規模が縮
小され二間四方程の生垣の中にあります。また、守
谷道から離れており、森の中に埋もれた様子が目に
浮かびます。

打始

第四十七番、三仏堂、国指定重要文化財、

米の井の龍禅寺境内。

ご本尊、 釈迦如来座像、阿弥陀如来座像、

弥勒菩薩座像の三仏、

移し寺、 愛媛の熊野山八坂寺。

ご詠歌、 花を見て 歌詠む人は八坂寺

三仏じょうの えんとこそきけ

三仏堂は、延長二年(922)伝誉阿闍梨(あじやりの)
開創と承平七年(937)将門により改修とあるが共に
不詳。平将門が守り本尊として崇敬したが、将門誅
伐(ちゅうばつ)後は一時公儀を憚って廃頽し、源頼朝
が建久3年(1192)千葉常胤に命じて修理させた。

徳川家康の代になって田畑の寄進がされたが、廃
禄上地の結果荒れてしまい、近年、重要文化財に指
定されてから修復が行われました。

現存の三仏堂は昭和61年に改装されていて以前
の面影は柱と壁の一部に残して、屋根は創建時の姿
に近い創建時の状態に改装されています。

取手は平将門の生誕の地と伝えられる、将門の母
は出産の際、大蛇になり子の身体を舐めることで矢
も刀の刃もよせつけない鉄の身体を与えたが眉間だ
けは舐めなかった為に、藤原秀郷に矢で射抜かれた
という伝説が一般論の様に云われています。

【注釈】金戒光明寺本により将門伝説は各地に残る。

三仏像、平将門の寄進とも伝わるが年代不一致。

三仏像は「一木三体彫り」という 一本の木から
三体を彫る様式です。

三仏とは過去の釈迦如来(須弥壇上の右下脇侍)、
現在の阿弥陀如来(中央)、未来の弥勒菩薩(左上脇
侍)をいいます。

阿弥陀如来は建久三年(1192)頃の作、大乘仏教の
尊氏お釈迦さまを右脇侍とした三尊配置です。

仏教界では釈迦如来が本尊で中央に座す中尊、

上脇侍が中尊の左側に座し阿弥陀如来、

下脇侍が中尊の右側、菩薩の位である弥勒菩薩の

「左上右下(さじょううげ)」となるのが決まりです。

仏教辞典では釈迦如来は現在でもあり、仏教界の
頂点に位置します。

龍禅寺の御本尊は阿弥陀三尊ですが脇侍が一般的
な三尊と違うようです。

中尊阿弥陀如来坐像、脇侍が観音菩薩と地藏菩薩
です、一般的には地藏菩薩ではなく勢至菩薩です。

こんな話が取手市史にありました。

法念上人は龍禅寺阿弥陀三尊の開眼供養をたのま
れたのですが、この頃は本尊が地藏菩薩の為、本来
は阿弥陀如来が上位なので断ったといっています。

三仏堂は天慶二年(938)開基、三仏像は將門に慕われ、源頼朝に守られ、千葉常胤に保存維持を受け、徳川家康から19石のご朱印を受けていました。

取手市史社寺編より

阿弥陀信仰は天平時代の浄土教からの古い歴史ですが、鎌倉時代の頃から阿弥陀如来像の人気とともに一遍、法然、蓮如らにより人気絶頂期を迎えました。福井県あわら市吉崎御坊巡礼は大人気でした。

龍禅寺は天台宗寺院のため戸頭の廃寺永蔵寺跡を管理する寺院として、また国重文三仏堂保全の寺として、大変重要な、そして歴史的な古刹であります、相馬霊場札所も綺麗に掃除され大変有難いことです。

昔は「安産三仏堂」とも言われ、安産祈願の人々が灯された残りのローソクを頂いて帰る習俗がありました。堂前には男根石尊像が林立していたそうです。

三仏堂は相馬霊場開催の時は何時も扉が開いていますが、何時でも開帳している訳ではありません。個人的に拝見するには盆休みかお彼岸など、檀家さんの墓参り時に開場する様なので、時を合わせて問いあわせると、開けてくれるかも知れません。

第七十九番、米井山(べいせいざん)無量寿院龍禅寺

天台宗禅寺。米の井

ご本尊、阿弥陀如来立像、十一面観音と地藏菩薩
移し寺、香川の金華山高照寺。

ご詠歌、十楽の 浮世の中をたすぬべし

天皇さえも さすらいぞある

山門は台風による倒壊の為再建を断念、本堂内陣の両側に仁王像二体が安置されています。

運慶作と言われていますが明確ではありません。

山号の米井山は平將門の伝説に由来します。

【伝説】承平七年(937)に、將門が武運長久祈願の為に三仏堂に詣でました、すると堂前の井戸から水が滝のような形で噴き上げました、水はさらに米になつて吹き上げたそうで、「米の井戸」から、地名が米の井となったそうです。

井戸跡は残っているのですが、条例で井戸水の飲用は禁止されているため農耕用等に限っています。

此の井戸には、將門に関するもう一つの伝説があります。取手では、將門生誕の地としての伝説が残っています。(生誕地は惣代人幡宮説も有り)

布施弁天の紅龍伝説では紅龍が舞い降りるので、舞い上がった元が此の井戸だそうです。

紅龍こそが平將門であり、舞い上がり先が生誕地という事でしょうか。しかし、將門は承平の乱で布施東海寺を焼き払ってもいます。

埼玉県児玉の榮螺(さざなま)堂と三仏堂の存在

龍禅寺の本尊阿弥陀と三仏堂の仏像の兄弟が、埼玉県児玉の成身院榮螺堂にありました。

関東三大榮螺堂、群馬県太田市、本庄市児玉、取手なのですが児玉の成身院にも三仏堂がありました、現在、三仏堂は荒廃している為、同境内の榮螺堂に三仏像が移され祀られています。

薬師如来、阿弥陀如来、釈迦如来の三仏です。

取手市埋蔵文化財センター

常総線ゆめみ野駅

ゆめみ野駅は東北大震災が起きた、2011年3月11

日の翌日の開業でしたが、地震と津波の影響は常総線にも及び列車は終日不通、開業式典も中止となりました、この日12日は九州新幹線も開通記念式典を行う予定でしたが、震災被災者の悲しみを思い中止されています。

第七十八番、山の坊 熊野神明社

野の井海老原医院脇広場の山の坊阿弥陀堂(現在集会所) 2005年に神社と大師堂は新築されました。

ご本尊、阿弥陀如来三尊、脇侍勢至菩薩と観音菩薩
移し寺、香川県仏光山郷照寺、

御詠歌、おどりはね 念仏申す道場寺

拍子をそろえ 鐘をうつなり

西蓮寺(廢寺)跡地と云われています、山の坊(山之家とも書かれる)には西蓮寺という大寺があり、常総線の踏切先の野の井バス停近くにある「藤(とう)から地藏」は西蓮寺の六地藏の一体であると伝えられ、大きな山門もあつたそうです。

天正時代(1573-1603)北条氏政と常陸の佐竹氏との合戦時に常陸勢に焼かれたとの伝承です。

熊野神明社

明治の寺社合祀令により、野々井の白山神社に合祀されましたが、平成十六年に村民により熊野神社を復活することができました。

海老原医院の診察室の建物脇に、屋敷門のある古い家があり庭先に四角い赤レンガで出来た古い煙突が立つ、明治大正時代に操業していた醤油工場の名残です。旧家は市内唯一の葦葺(わらぶき)屋根です。

【四国移し寺の郷照寺(こうしょうじ)】

境内からは瀬戸内海にかかる瀬戸大橋の眺望が素晴らしいお寺です。

往時から港町として栄え、四国の正面玄関といえる場所なので、高僧や名僧との由縁が深い霊場でもあります。地元では「厄除うたづ大師」と呼ばれ、また四国霊場で唯一「時宗」のお寺です。

縁起によると、郷照寺は神龜二年に行基菩薩によって開創されました。行基菩薩は55センチほどの阿彌陀如来像を彫造し、本尊として安置され「仏光山道場寺」と称していました。

第五十番、東光寺(廃寺)薬師堂、下高井集会所、

ご本尊、薬師如来立像、

移し寺、愛媛県東山繁多寺(はんだじ)、

御詠歌、よろずこそ 繁多なりとも怠らず

諸病なかれと 望み祈れよ

取手市内で一番古い建物が集会所になっています。薬師堂の建物は十六世紀後半の遺構といわれています。礎石に乗せた柱や天井の垂木の加工に古さが伺えます。木造の薬師如来像が祭られています。

ガラス戸の大師堂は珍しく、羯磨かつまが描かれており割れないことを祈ります。

第四十九番、普蔵山高源寺、臨濟宗妙心寺派

ご本尊、承平元年(931)平将門による釈迦如来、

移し寺、愛媛県西林山浄土寺、

御詠歌、十悪の わがみをすてずそのままに

浄土の寺へ まいりこそすれ

樹齡一六〇〇年のケヤキと樺地蔵。

永仁元年(1293)夢窓正覚国師大和尚開山、高井城主であった高井十郎胤永(相馬次郎重胤)の菩提寺、墓地内に墓石があり、先祖が家老職であった廣瀬家が守っています。

千葉県野田市から柏市に至り残る、利根運河を造った廣瀬誠一郎とその一族の墓と生家があります。

高井胤永、(たかいたねなが)、

永祿元年(1568)寛永17年1月13日(1640/36)、古河公方家、後大久保氏家臣。下総相馬氏の一族で下総国高井城城主。相馬治胤の弟。

号は覚庵。子に相馬胤将がいる。

高井氏は下総相馬氏の分家ですが、その系譜は明らかではなく、治胤、胤永兄弟の実父の名も詳らかではありません。兄の治胤が下総相馬氏の家督を継いだため、弟の胤永が実家の高井を継ぎました。

兄に従って後北条氏に従属し、佐竹氏らとの戦いに従事、天正12年(1584)の沼尻合戦においては、北条氏直から感状が与えられています。

豊臣秀吉の小田原征伐では兄とともに小田原城に籠城して改易されました。後に徳川家康に召しだされるが大久保忠隣改易で息子胤将が連座したことに加えて、大坂の陣で軍律違反を犯したとして改易され、その後は郷里の高井に戻って隠遁生活を送ったといえます。

菩提寺の普蔵山高源寺の墓地内に陵墓があります。

嫡男胤将(たねまさ)、天正6年(1578)、

父や伯父とともに小田原城に籠城後に大久保忠常忠職父子に仕えます。関ヶ原の戦い後、一時出奔して黒田如水に仕えたが程なく帰参しました。

その後、大久保忠隣失脚のあおりで不遇を囲ったが、幼君忠職に仕えてその再興工作に奔走しました。

慶安5年(1652)4月18日 75歳で没

利根運河に生涯を懸けた廣瀬誠一郎

明治15年群長という役職で岡堰の改修を行い、その後、利根運河の建設に遁走した、しかし、県令事業としては頓挫した為、民間会社「利根運河会社」を設立して利根運河を完成させました。

利根運河により、水海道や取手、土浦や銚子から東京への交通の便が早くなり相馬は潤いました。

鉄道が開通するまでの水運は賑わいました、守谷棧橋から東京まで上り十時間、下り六時間とか。

廣瀬誠一郎、天保9年(1838)下高井に生誕、

明治23年3月に病死享年五十四。

かつて利根川と江戸川間を航行する船は、両川が分岐する関宿を経由しなければならず、また鬼怒川合流までの利根川には浅瀬が多い為、渇水時には大型の高瀬舟では航行が困難という問題がありました。

利根運河計画はこれらの問題を解決するもので、茨城県北相馬郡選出の茨城県会議員であった、廣瀬誠一郎が当時の茨城県令人見寧(ひとみやすし)、天保14年(1843)〜大正11年(1922)に陳情し、人見がこれを受けて推進しました。

利根運河を派川(はせん)利根川とも呼びます、また開削当初は利根川側の「三ヶ尾(さんがお)沼」名から三ヶ尾運河ともいわれました。

利根運河の設計に当たったのがムルデルやデーレケ等のオランダ人技師で、工事は明治21年(1888)に開始され23年6月に竣工しました。

利根運河の開削により、関宿を経由して東京に向かっていた船は航路をこれまでより33キロも短縮し、日程も3日を1日に短縮することができました。

明治中期から大正時代にかけて隆盛をきわめた利根運河も、その後の鉄道の発達や道路の整備拡充により通船は減少の一途と水害の修復費により衰退して昭和16年に、運河としての役割を終えました。

現在は水質改善の研究場所となり、水辺は親水公園として整備され、東武野田線運河駅近辺から運河沿いは、桜の名所にもなっています。

新四国利根運河霊場八十八ヶ所「倫書房」。

勝海舟と廣瀬誠一郎、

勝海舟、文政6年1月30日(1823)～明治32年(1899)

江戸城無血開城で知られる勝海舟は晩年、利根川の和田沼に鷹狩りに訪れていたようです。

根拠は柏市布施にあった旅籠を営んでいた頃の先代の話を聞いている御子息からお伺いした話です。

和田沼は、雁や鴨の渡り鳥の飛来地で江戸時代から雁猟で知られるところでした、シーズンになると布施の旅籠は猟師の宿泊客で賑わったそうです。

布施弁天から利根運河までに大きな沼が六沼あり総じて和田沼とよみました。現在の田中遊水地で柏齊場下辺りにありました、徳川慶喜や有馬侯らの名士が明治20年頃雁猟にお訪れていたそうです。

この頃、廣瀬と人見寧は親しい関係であり、勝海舟と人見寧は明治三年に薩摩へ遊学の際、西郷隆盛に面会を申し出る為、勝海舟から紹介状と十両の旅費を受けているほどの師弟仲でした。

「勝海舟日記」に、明治20年2月18日「人見、一人

同道・…」とあります。廣瀬家に残る「書」の年月と同じ頃であり、「人見一人同道」こそ、勝邸に人見と訪れた、廣瀬誠一郎なのではないでしょうか。

更に、明治12年4月6日「利根川を下り、キリッブ(川の流れを弱める為)に、川の中に杭を並べて打ちその中へ大きな割石を据えた護岸、伝統的な日本工法)を見る。初夜、帰宅」と記され、利根川に来てい

高井城趾公園、

永禄四年(1563)高井城主の高井十朗直将は大鹿城主である大鹿太郎左衛門の娘を正妻としていました

が、小文間城主の一色宮内政良(いっしきくないまさよし)によって闇討ちされた時、稲の出城から出陣して我孫子の柴崎城主の荒木三河守等と共に、雁金山(かりがねやま、現取手市城根(じょうね)の合戦に於いて、敵の一色宮内を討って取った武将です。

取手の歴史では名将として名を残しています。この民話は地名取手の由来を伝承してきました。大鹿城の砦は現在の取手競輪場の南側入口の坂左側に在ったと云われていますが、城址の形跡は全くありません。高井城址は取手で唯一その痕跡を残してくれました。

高井城は、長治年間(1104～1106)に信太小次郎重国が信太(しだ)郡から移り住み築城し、相馬氏を名乗ったという。建武三年(1336)の相馬親胤宛の「斯波

家長奉書」に高井村の名が見え、相馬氏の知行地であったことを示しています。

高井城主は代々相馬を名乗り、天正年間に高井下総守直将がはじめて高井氏を称したといひます。

守谷城主の相馬治胤は高井何某の子で、守谷相馬氏に養子入りしている、高井城主でしたが後に守谷城主となり活躍したが、高井十郎民部太夫胤永のとき天正18年(1580)の小田原の役を向かえ、北条氏に味方したため没落した。このときに胤永の三男胤正の子秀胤が横瀬伊勢守保広を名乗って江戸時代前期まで居住したが、のちに広瀬氏と改め帰農したため廃城になったといわれる。

取手市内では城郭跡がすっかり残る唯一の城跡で公園として残されていますが、高井城の一面は現在宅地化されており、その規模は三分の一ほどになっています。

第五十二番、高井山妙音寺(廃寺)

ご本尊、薬師如来、

移し寺、瀧雲山太山寺(りゅううんざんたいざんじ)

御詠歌、たいさんへのぼれば汗のいでけれど

のちの世おもえば なるの苦もなし
現在は、下高井下坪集会場となり妙音寺本堂はありません、大師堂は新旧2つあります。

東京浅草の松屋旅館の主と信者一行による寄進であると、大師堂脇の老婦が語ってくれました。妙音寺も高井城内にあり、この奥百メートル先程には高井城の城門があったそうです。

妙見八幡社、高井城内にあった相馬家の氏神です。

承平元年(931)平良文が孫(養子)の將門に加勢して兄の平国香と戦い討たれようとした時に童顔の妙見菩薩が現れて、敵である国香に劍の雨を降らせて良文は助かる、という伝承があります。

平家の子孫である千葉氏と相馬氏の守神であります。妙見菩薩は北極星がある北斗七星を神格化したもので仏教の伝来と共に占星術上の方位を指す、十二支の子の方角である北を知る方法として中国西域のシルクロードより、倭国(やまと)、大和、日本に伝わり信仰されました。

我孫子市天王台の柴崎神社には、童顔の妙見菩薩が亀に乗っている石像が祀られています。

岡堰と小貝川 高齢者福祉センターさくら荘、廁

寛永七年(1630)、関東郡代伊奈半十郎忠治によって開発された岡堰は、明治十九年、始めて新式の水門を持つ堰となったが、翌年の大洪水で壊され、明治31〜32年、総工費64200円余をかけて大改築された。その後昭和12〜21年につくられた水門、28〜35年の工事で出来た洗堰があったが、現在のものは平成8年11月に完成したものです。

小貝川の水源は栃木県那須烏山市曲畑(そりはた)の小貝ヶ池にあり、途中五行川などと合流しながら取手市で利根川に合流しています。子飼川、小飼川、子養川と云われ、養蚕の桑の木が多く見られた川岸から桑葉を餌とする、蚕を飼う川が小貝川の語源の一説で、源流にある案内板で説明されています。

岡堰の上流のつくばみらい市谷和原には福岡堰が、同じく下流の竜ヶ崎市に豊田堰があり『関東三大堰』

と呼ばれ、谷和原三万石や相馬二万石の穀倉地帯をなし、米野菜は勿論、魚等の食糧は江戸へ運ばれていました。壮大な穀倉地相馬二万石の開拓者である伊奈忠治の名は父忠次の埼玉県伊奈町について、つくばみらい市の伊奈村として残りました。

水神岬公園

岡堰は古来、景勝地としてされてきましたが、特に明治32年煉瓦造りに改築してからは、赤茶色の明治的西洋風の構造物が青色の水に影を落とし、周囲の樹木の緑に映えて、一層その名が高くなりました。

それ以前の明治19年4月8日、北白川能久(よしひさ)親王殿下が岡堰を巡覧されてその風光を称賛され、桜樹の植付料を賜ったので、当時の郡長廣瀬誠一郎が堤防上に植樹して以来、一躍、桜の名所として名を馳せました。しかし現存無。

俳人高野素十(すじゅう)

法医学教室に勤務していた大正七年(1918)水原秋桜子(しゅうおうし)の勧めで俳句を始め、後に高浜虚子に師事し、水原秋桜子と共に「ホトトギス4S」の一人といわれた、山王は人気俳人であった高野素十(すじゅう)の故郷であり、帰省するたびに岡堰に名句を残しています。昭和51年享年83。

水喧嘩 徳川の遠に さかのぼる 素十

この句のように、岡村と寺田村の水争いの歴史は古くからあったようで、渇水時は生死を掛けて争った様です。平成17年藤代と取手の合併は、水争いがなくなった今になって実現したのででしょうか。

故郷の 喜雨の山王 村役場

喜雨(きう)、夏の土用の頃の雨)

山王小学校前の山王公民館に句碑があります。

ふるさとを 同じうしたる 秋天下

山王中学校創立十周年記念の集いで講演を行う、女の子 枯れ木に顔を あてて泣く

等を岡村に残している。

我孫子の子の神大黒に於いて、手賀沼吟行が何回か行われて居た、秋桜子、山口誓子、阿波野青畝(せいほ)、高野素十のホトトギス4Sが来ている。

親王山地蔵院延命蜜寺、高須弘信講第五番札所

真言宗豊山派、平將門の駒形があり愛馬が埋葬。御本尊、地藏菩薩。岡神社に大日如来関連石仏があり延命寺は岡村から現在地に移された様子です。

第七十四代鳥羽天皇の御宇(1077〜1123)紀州国那賀郡根来(ねごろ)に覚鑊(かくぼん)上人という高僧がいた。夢で「自分は下総国相馬郡岡村の地藏である。その昔滝口小次郎相馬將門は自分を何時も祈願し、朝晩に供養を受けた。しかしながら將門は前世の宿縁から朝廷に謀反を起し、逆族となり敵の矢で死んだ。貴僧も將門ゆかりの人である。急ぎ関東に下つて一寺を建立すれば將門ゆかりのものはいうに及ばず、無縁の衆生まで救われるであろう」とお告げがあった。上人は不思議なことと思つたが、その時はそのまましておきました。

十数年経った長承三年(1133)正月廿一日の子の刻再び同じお告げがあり、上人は東国へ下る決心をして旅立ちます。だが方々訪ね歩いたが分からない。ある夜山王の地に到り草庵に宿を取ったところ、夜半になって山の麓が光っているので奇異に思い庵主

と共に辿って行くと、周りに堀があり、草木が生い茂った島に塚がありました。庵主がいうには「この地に將門の靈廟があつた」との事。上人が草を分けに入られた処、一体の地藏菩薩が出てきました。

上人はその場所を「仏嶋山(ぶつとうざん)」と名付け、翌年の保延元年(1151)一寺を建立し、親王山延命寺と名付け、庵主の覚如を一世と定めて根来に戻られました。延命寺はその後、小貝川河畔の台地に移転し、仏嶋山は古墳になっています。

岡の仏嶋山古墳、(ぶつとうざんこふん)、

平將門の祠がある。古墳は、以前は大きく高さもあつたが、学校用地の造成、岡堰の築堤などに土砂が採取され小さくなった。古墳の頂きの祠は平將門を祀っている。

東京国立博物館平成館企画展示、特集陳列「東京国立博物館コレクションの保存と修理」開催期間2010/03/16～05/09、土師器(はじき、素焼きの土器「かわらけ」の前世の食器や埴輪)坏一個、茨城県取手市岡字大日の仏嶋出土古墳時代は六世紀根本安雄氏寄贈「22703 考古資料相互活用経費による修理、他20品が展示されました。

明治時代の仏嶋山古墳発掘とたりの話

「仏嶋」は岡台地の大日山を中心とした岡と和田、配松の神住地区を含めて中世に呼称された集落地で、俗称「岡不知」といわれた所の傾斜丘陵地の土をくずし、この土を運んで岡堰の築堤と道路改修の工事で明治二十八年に古墳が発掘されました。

この岡堰用水の工事を行っていた時に、古墳を真

正面から掘削していた人夫たちは、怨霊にとりつかれます。古墳と言う神聖な地を開拓したため、事故が多発し「岡不知(おかしらず)のたたり」と言われ、また古墳調査も必要のため、工事は中断されました。仏嶋山古墳の周りは表郷用水路で囲まれ、参道は分断され現在に至っています。

用水工事は昭和八年になって、やっと完成しました。

野仏と舟形地藏、

藤代町指定文化財でしたが、平成十七年取手市合併により指定解除されました。

水路脇に石仏がある道を、奥へ入ると舟形の光背を背負った大きい地藏と野仏(のぼとけ)があります。

地藏菩薩

舟形光背2m49、立像高1m79、寛文六年(1666)の建立。順海、祐海、順永の各権大僧都の名が刻まれています。

野仏

光背78センチ、座像55センチ、延命寺法印順海、延宝八年(1690)とある。この地藏は舟形地藏の裏にあるので「裏地藏」とも呼ばれています。

大日山古墳

(だいにちやまこふん)、高須第八番札所この古墳は岡台地の先端に造営された古墳で、高さ2m80、底径18mで副葬品は不明です。

かつてこの附近から各種玉類、鉄やじり等が発見されたが、築造年代は古墳時代後期でないかと言われている。近世になって大日信仰が盛んになるとこの墳丘に種々の石碑や石造仏が建てられたので、大日山の名はそれによって付けられたものと推定。

現在、墳丘上に岡神社が建立されています。

岡不知、(おかしらず)、

岡の部落一帯の山は上人が夢に見た場所をなかなか見つけられなかったので、「岡不知」と呼ばれている。「不知」は、「ふち」と読むが「**不知」のよりに、「**知らず」とも読みます。意味は、知らないこと、知恵のないこと、かしこくないこと、「不知案内」と辞書には記載されています。

更に「**不知」には、千葉県市川市の藪不知や新潟県の親不知子の有名な所があります。

不思議なことに、藪不知では平貞盛、親不知では平頼盛、岡不知では平將門と、平家が共通して登場します。平家落人(おちゅうど)の郷なのででしょうか。

「藤代町合併50周年記念誌」では、岡不知を「地元の人でも道に迷うほど、草木の茂る山」と説明しています。富士の樹海ではあるまいし、たかが海拔10m程で、広さも上野不忍池程度の林で、どうすれば道に迷うのでしょうか。あきらかに「不知」の解釈が間違えているとしか思えません。

千葉県市川市役所の前にある「八幡不知森(やわたしらすのもり)」は、藪不知(やぶしらす)として全国に知られた名所の一つです。この藪不知には古来多くの話が伝えられていますが、中でも次の話は有名です。

それは承平天慶(てんぎょう、將門)の乱の時、平貞盛がこの地に「八門遁甲(はちもんどんこう、陰陽道に基づいた呪術の一種、占いと違いますが)の陣」を敷いたが死門の一角を残すので、この地に入るものには必ず祟りがあるとの言い伝えがありました。

後にこの話を聞いた徳川光圀は「馬鹿げた話」と

藪に入ったところ、果たせるかな、白髪の老人が現れ「戒(いましめ)を破つて藪に入るとは何事か、汝は貴人であるから罪は許すが、以後戒めを破つてはならぬ」と老人の怒りを被つたといひます。

この他「藪不知」については、この地が行徳の入会地(いりあいち)であり、八幡の住民はみだりに入ることが許されず、そのため「八幡不知」と言われたのが藪不知になったともいわれています。

将門没後「都」から逃げてきた家臣一族は後世に、遁甲(とんこう)としての社を大日後に建立し、人々が近付けないように凶り、近寄りがない所として他国の侵略から守るため、或いは、平将門の末裔である身分を隠す為に、怨霊説を広げ近寄りがない所として「岡不知」としたのではないでしょうか。

以上のことから「不知」とは、人を寄せ付けない聖域や、平家落人の隠れ里と言えます。

郷州海道、

守谷市みずきの団地内に郷州小学校として残るのみで住所地名としては使われていない、県道388号線が守谷市道郷州沼崎線と呼ばれています。

郷州海道は、相馬郡守谷の相馬氏の居城であった守谷城の大門から、守谷城門前の愛宕社(野鳥の森)、みずき野の郷州小学校、上高井の桜坂、高井城址、岡の大日山を結ぶ古道でした。

平将門の末裔である、相馬氏の軍事通信用途の為の道と思われまふ。

台地乾燥化で湖沼の陸地化後には、成田街道に接続され銚子道と言われる様になりました。

昭和53年、守谷みずきの団地造成中に郷州原遺跡が出土して縄文土器等が多数発掘されました。江戸時代は、誰の支配にも属せず、無主無住の免訴地でした。

高田(小山田)与清(ともきよ)の相馬日記

郷州地名は、郷州原という湿地帯を含む原野であったことは明らかですが、地名の由来は不明です。

郷州街道という街道名が登場する文献は、相馬日記で「がうしう海道」と記載されています。

街道を「海道」と記していますが、奈良時代の五畿七道が制定された時代から、街道は津や駅を結ぶ海路であったため海道と記されていました。

やがて津や駅であった港は、利便性の良い陸上を利用する様になり、東山道に於いては山間部に駅が設けられるようになると、海道が街道へと徐々に変化して現在では、海道が使われなくなりました。

高田与清は、天明三年(1823)、武州多摩郡小山田村(都下町田市)に生まれ、村田春海らに国学を学び、文化三年(1806)見沼通船方の高田好受(手賀沼干拓に功績のあった高田友清の子孫)の養子となる。

後に、徳川斉昭に乞われて「大日本史」編さんにも参画したといわれる江戸後期の国学者です。

その与清が、文化十四年(1817)八月十七日から十一日間、下総国を巡遊した時の紀行文『相馬日記』を著しました。

与清の主な行程は、江戸↓新座↓岩槻↓川口↓野田↓水海道を経由して、八月二十四日筒戸村禅福寺、守谷で二泊、二十六日守谷、布川↓木下↓成田↓千

葉↓中山↓市川↓両国と巡る。与清は行く先々で地誌や伝承などを紹介し、感想の和歌も披露しています、守谷市近辺で訪ねた所は次の通り。長龍寺、牛頭天王(八坂神社)、相馬偽宮(守谷城址)、岡の延命寺、駒塚(駒形古墳)、太郎堰(岡堰)、仏嶋山古墳、大日山古墳、桔梗塚、守谷市高野の海禅寺、西林寺。

与清が訪れた頃の郷州海道

与清が相馬偽宮を訪れた時の一章节に、「この所よりは千町の田面打越し、奥山、一ノ台、向地(同地)、赤ぼけ、岡村、がうしうなどいふ所々、目路遙かにぞ見渡されたる。がうしうが原といへるは、田中の離れ島にて、縦横に上道一里余の広野なり。昔淡海の廻れる時は、えもいはぬけしきの島なりけむとぞ思ひやらるる。今、この野中を行く道を、がうしう海道とよべり」。この与清が守谷城址から見た「がうしう海道」を「郷州街道」といいます。

この古道は、下総相馬氏が守谷城と支城の高井城を結ぶ、軍用道として利用したとされます。また、愛宕地先で、天保十一年(1840)十月に造立された「二十三夜塔」が発掘され、その塔に「山王道」と道しるべが刻まれました。

『郷州原遺跡発掘調査報告』より、但し、平成六年発行の『守谷の石造物』には掲載されていません。

この山王道とは、江戸時代末の利根川図誌でも触れている道で、山王新田で小貝川を渡り山王、和田、岡、寺原で守谷道に合流して、大鹿、取手白山に至る道です。岡村から先の郷州街道は、和田で「水戸街道大廻り道」に合流していました。

「相馬日記」より抜粋

「相馬日記」は高田与清(ともきよ)の文化14年(1817)8月17日～27日までの下総各地の巡遊記です。四巻から成っています。版本は文政元年刊行の四冊本で、鹿島神宮の宮司で国学者北條時鄰(ときちか)が注を付しています。

巻の二、お累(るい)の怨霊絹川かさねが淵です。

巻の三、相馬郡とその周辺になります。

8月24日、谷和原村筒戸村の禅福寺～守谷野～矢田部海道～守谷の里～徳怡山長竜寺～相馬の偽都、守谷愛若～一の台(取手市市之代)～向こう(守谷市同地)～赤ぼけ(赤法華)～岡村(取手)～がうしう(守谷市みずき野)～岡村真王山延命寺～子飼川の太郎堰(岡堰)～仏島(岡仏嶋山古墳)

8月25日、守谷海禅院～西林寺～守谷城妙見曲輪

8月26日、取手の酒詰村(さかづめ)～毛有～小文間第

六天山～戸田井～布佐の津～布川の里～印幡郡竹袋(印西町)～安食川(あじき)～印幡沼～松崎村(多古村)～天竺山竜角寺～成田の郷部村(こうぶ)～成田山新勝寺 27日は江戸帰還です。

24日より一部分

岡村延命寺の北の方なる子飼川のながれをせきとめし太郎堰(岡堰)といふ大堰あり。

洲崎(すざき)のあらら松原に辨天の御廉香(みあらか)ありて、そのけしき繪に書たらんやうなり。この見わかしなる所に、常陸國筑波郡足高(あたか)といへる里の山を掘れば、土饅頭といふものおほ(多)かりとて、餘(まろ)におくれる人あり。そはおほきなるちひさなるかはらけのさまして、花に似たるかたあ

り。から國にて海燕(かいえん)といふ貝はこれなるべし。本朝里人談(りじんだん)に、周防国吉敷郡(すほう)のくによしき(こおり)高原氷上山(ひのかみやま)の土中よりも土饅頭(どまんじゅう)といふものいづといへり。されどかたちは今のおおなからず。

佛島といふは堀をめぐらしてかまへし所に、草木しげりくらがりて、おぞ(怖)ましき古墳なり。中にとば(少許)かり草おひぬ所あるを、つよくふめば、地にひびきありてきこゆ。これやこの兵器(つはきもの)などあまたうづみしがゆゑに、その鐵氣(かねのけ)によりて、草も木もおひぬなるべし。里人これを將門が墳(つか)なりといへり。佛島と名づけしは、かたへに地蔵の石像(いしのみかた)、又は何くれの佛の石像たれば也。

坂をのぼりて高き岡に大日堂あり。ふるき松などありて、ながめよろしき所なり。

將門がうたれし跡なりといふ。つらつら此堂のさまを見るに、古墳の上に建たるなり。これ將門が骸(かばね)を埋(うづめ)けん所にて、かの佛島は件類(ともがら)のしかばねや、兵具など埋たんなるべし。

米野井の桔梗が原といふは、將門が妾(おもひもの)桔梗の御前(ごぜん)といふが殺されける所にてその墳あり。今も桔梗はありながら花咲ことなきは、この御前がうらみによれるなりといへり。

◆ 詳しくは別資料

「郷州海道と高井城址」を御参照下さい。



専用QRコード

相野谷川、

相野谷川沿いに、水の公園、新取手住宅東端を経て駒場、本郷へと相馬二万石の田園を左手に見ながら利根川の城根という所まで流れています。

相野谷川は取手市内を流れる一級河川で、約4キロ程下流で利根川に合流する短い河川です。

水源は、2014年の永山自治会役員様の聞き取りにより、老人ホーム「さらの杜」の稲戸井駅寄りの「水砂」の谷地と判明しました。但し、更に水道は続いているので上城の稲戸井駅近辺の可能性もあります。ゆめみ野駅の開業によって、団地が造営され、相野谷川上流の河川の一部は暗渠となっていますが、甚五郎池を含み自然湖沼を埋めてしまった後に、弊害が起きないか将来に不穏が過ります。

相野谷という地名は、茨城県常総市の常総線北水海道駅の東側に広がり水田として残っています。

R294とR354の交差する近くに相野谷八幡神社が広大な大地の中にあり、水路が小さな谷間を形成している様子は「野の谷」と言えます。

また、我孫子市天王台には、相野谷通りと相野谷跨線橋がありますが、相野谷跨線橋から約500m先の取手方面常磐線路上に踏切がありました「あいのや踏切」と言っていたそうです。常磐線複々線化であいのや踏切は撤去されました。

大日山の朝日御殿と桔梗田(沼)の伝承、

平將門が七人の影武者に囲まれて朝日を拝んでいた。討伐使の藤原秀郷がこれを聞きつけ、秀郷の妹という説もある桔梗御前を「將門と和睦する」とだ

まして將門の急所を教わり、こめかみが弱点であることを聞き出した。

將門は、天慶三年(940)二月十四日、茨城県猿島町幸嶋に於いて、急所のこめかみを矢で撃たれて討ち死にした。

真相を知った桔梗は岡神社下の沼に身を沈めた。この沼のちに田となり「桔梗田」と呼ばれたが、ここを耕作する農家の娘は嫁に行けないことが続き、後に集落の共有地になったと伝えられています。

大山(新取手5)と久寺家

大山城主は、久寺豊後守大炊(おおい)左馬之介と丹後守の兄弟は、平將門が愛妾桔梗御前の居城朝日御殿を築いたという岡台地の向かい側台地に居城。

大山城主豊後守、寺田字大山にあり「承平天慶(じょうへい)てんぎょう」の乱(930~940)の当時「久寺豊後守」という、近郷きつての武將が居城し、平將門の家臣として、弟の丹後と大山城を固めていたが、天慶三年(940)に將門が敗死したことを知り、征討軍が大挙押しよせる難を避けるために城を捨て南方の我孫子に逃れました。

後に、兄の豊後は、現在の我孫子市久寺家にて、弟丹後は我孫子市柴崎に隠れて帰農したという。

久寺家の豊後守子孫である大炊氏宅には、將門に関する天慶三年の位牌、及び違物の頸(くびき)天神という天神社があるということです。

久寺豊後守は、通称を左馬之助と名乗っていたが、これが天慶三年に逃れてこの地に住むと、名を大炊と称するようになりました。

日本武尊を祀り大鷲(おおわし)神社と称し近在の中央学院大学の守護神を管理されています。

よって当時に於ける大炊氏の威勢の大なることをみる事が出来、江戸時代同地方の名主に就任。

弟の丹後守は我孫子市柴崎に隠れ、一時は盜賊にまでに落込みはしたが、大井と名乗り村の名主になったという、両家共現在に至り祭り事を行っているようです。このように、取手市大山と我孫子市久寺家が歴史上で関連していた事に、歴史探索の面白さを感じます。

旧水戸街道迂廻路と守谷道(佐倉道)

青龍神社前の取手向原踏切の道が守谷道です。

寺原駅前から寺原踏切交差点を山王方面の県道130が佐倉道、旧水戸街道四番目迂廻路で現在取手谷田部路線バスのルートで幹線であり古道でもあります。但し岡く和田間は、現在より小貝川沿いです。法海寺は主要道の分岐に建つ重要拠点と言えるでしょう。神仏合祀時代は青龍社と一体の神仏習合の一寺でした。

佐倉道は、江戸時代佐倉藩の領地であった、守谷や筑波北条への取手経由の道でした。

赤松宗旦著「利根川図誌」にも佐倉道の記載があります。本来「佐倉街道」とは、水戸街道新宿から江戸川を渡り市川、酒々井、佐倉を結ぶ街道で、後に「成田街道」とも呼ばれています。

幕末までの佐倉から各領地への道は放射状に伸びていた為「佐倉道」はあちこちにありました。

その中の宗道、印旛沼、木下、湖北、中峠、取手

台宿の佐倉道が此処になります。但し利根川図誌ではこの先の、山王新田迄記されていますが、どうも守谷から笠間街道で谷田部、筑波小田説が後の研究で有力の様です。取手筑波線の県道19号も古道であるので佐倉道と呼ばれていたと思われれます。

余談ですが、佐倉道は利根川を「取手の渡し」ではなく「中峠の渡し」現在の小堀の渡しを利用して来た様です。理由は不明です。

岡く和田間の旧水戸街道迂廻路は一部不明。

第六十九番大師堂先の旧街道は、駒場交差点の二股路を左方向へ進みます。直進路は新道です。

字地名「後山」は旧家の庭先を今は無名の道が続き急な下り坂を降りると相野谷川沿いの道に突っ込みます。田圃が広がり景色が変わります。

新取手団地を左側に見て進むと、大きな農家が台地上の目前に現れます。この農家が平將門の家臣の城山で大山城の跡地です。道は此の屋敷を巻くように左へカーブしています。途中の分岐路で未舗装路が旧水戸街道です。道は相野谷川橋を渡り岡台地に突っ込み、其の先は迂廻路道の痕跡が無くなる。

打止

第六十九番、法海寺跡(廃寺)、石臼観音、

ご本尊、聖観世音菩薩

移し寺、香川県七宝山観音寺、

御詠歌、観音の 大悲の力強ければ

おもき罪をも ひきあげてたべ

寺原踏切から県道130号を東へ50mほど進み、

左側歩道に大師道の石柱あり、その路地を入ると、お堂が2つ建っています。法海寺跡ですがお寺はあ

りません、焼失したまま再建は出来ませんでした。堂前には石臼が置いてあります。昔この聖観音像の台座は石臼で出来ていて回す事が出来ました。

また、石臼は女性が座ることで、子宝授の利益があると伝えられていました。

この観音堂では終戦後まで、念仏踊りが行われていたそうです。

釈迦涅槃像(しゃかねはんぞう)、

江戸時代の作で、身長は90cm程寝姿像の涅槃像がありました。釈迦が入滅する様子を仏像としてあらわしたもので寝仏、寝釈迦像、涅槃像とも呼ばれます、足の裏には宇宙観を示す文様などが描かれています。寺原の寝釈迦は足の裏は観ることが出来ません。

2014年に行方不明騒ぎがありました。私たち相馬霊場めぐる会で10月のある日、下見で訪れると涅槃像がありませんでした。近在の住人に話しましたが、「堂の鍵を管理している者に話しておきます」ということで別れました。

後日、「像は台座から後ろの壁の間に落ちていました」と連絡が入りました。

それから数か月後、近くの東漸寺の住職が管理することが決まり、東漸寺本堂に祀られています。

なお、釈迦入滅の様子を絵画的に描いたものを涅槃図、仏涅槃図と呼びます。

茨城県の寝釈迦像は、取手の法海寺観音堂の他に、下妻市金林寺(時宗)、旧新利根町阿弥陀寺(時宗)、旧波崎町神善寺(真言宗)、旧岩瀬町小山寺(天台宗)の富谷(とみや)観音にあります。特に小山寺は国宝の三

重塔もあり本堂の千手観音は指定文化財で拝観することができ癒されます。更に栃木県真岡市の高田山専修寺には、元禄15年(1702)江戸湯久兵衛作の木造金箔塗り、日本最大の木造寝釈迦像があります。

【四国八十八ヶ所の六十九番について】

四国六十九番の観音寺の本堂である金堂は昭和34年に解体修復されているが、重要文化財に指定されています。ところが本尊が収まる厨子の裏板に、貞和三年(1347)の落書きがあり有名です。

この落書きの主は、常州下妻(下妻市)の僧でした。まあ、落書き自由なお寺ですが・・・

四国68番と69番は同じ境内にあるのですが、68番は神恵院(じんねいん)で通称八幡宮と呼ばれます。なお納経所は一緒です。

伊奈半十郎忠治と岡堰、

文禄元年(1592)〜承応二年(1653)、鴻巣の勝願寺筑波郡伊奈村と村名を残し、相馬二万石という新田を残した代官です。

忠治の父忠次は徳川家康に仕えて「利根川の東遷」「荒川の西遷」の大事業を命じられ、忠次が事業を引継ぎました。

忠治は寛永六年(1629)鬼怒川を野木崎に小貝川を小文間戸田井へ新河道を開削して分離、それぞれ利根川に合流して、分離により水量減少に成功。

寛永七年、岡で小貝川に堰を設けて水を溜めて用水路を開削し、相馬二万石の新田を造り、大都市「江戸」の食糧原産地としました。

岡堰元坊(もといら)からの用水は二分され西側の

表郷用水と東側の裏郷用水を基幹用水として相馬の地を潤し現在も重要用排水路として活用中です。

毛有の表郷用水脇の観音堂には境内に「伊奈忠治頌徳碑」が建立されています。

また、忠治を湛えた伊奈神社が、小貝川の福岡堰にあり、桜の名所となっています。

忠治は、御府内(江戸中心地)の玉川上水の工事を玉川兄弟とともに行っていきます。

しかし、難工事のうえ工事資金難に陥り、忠治の計画水路は失敗して自ら役務から外れましたが、玉川兄弟は自己資産まで注ぎ込み上水路を完成させました。この話は歴史に残り有名です。

玉川上水は現在、水路は暗渠となって道路下を流れ、その清流を見ることが出来ないが、新宿御苑の脇には江戸時代の頃の玉川上水が保存され「内藤新宿分水散歩道」と言い小川沿いに歩けます。

忠治は二度の発作により病死、享年六十二、埼玉県鴻巣市の勝願寺に父忠次と共に眠っています。陵墓は埼玉県指定史跡です。

甚五郎崎遺跡と今は無き相野谷湖

相野谷湖は、老人ホーム「ふれあいの里」後方の山側にありました。正式名は甚五郎沼という湧水湖沼で水源は岡堰からの地下水と考えられていました。ふれあいの里の奥に静かに水を湛え、冬になると多くの鴨の群れが羽を休め越冬していました。

相野谷湖は「ふれあいの里」敷地内で沼の周りが鉄柵で囲まれていた為、湖沼の存在に気が付かなく安全上の鉄柵ですが近寄れない状況でした。

現在、伊藤ハム事業所敷地内の電源施設と化しており、相野谷湖は埋め立てられてしまいました。

相野谷湖の面影は相野谷川に注ぎ込む排水路兼用の暗渠があるのみです。

甚五郎遺跡は、伊藤ハムの敷地全体と相野谷湖の西側を囲むように遺構が広がっていた様です。

発掘調査は、平成六年(1994)に ゆめみ野区画整備事業の事前を開始されました。

調査により、縄文時代早期～前期と平安時代には集落として、更に中世～近世は墓域として利用されていた様子が判明しています。

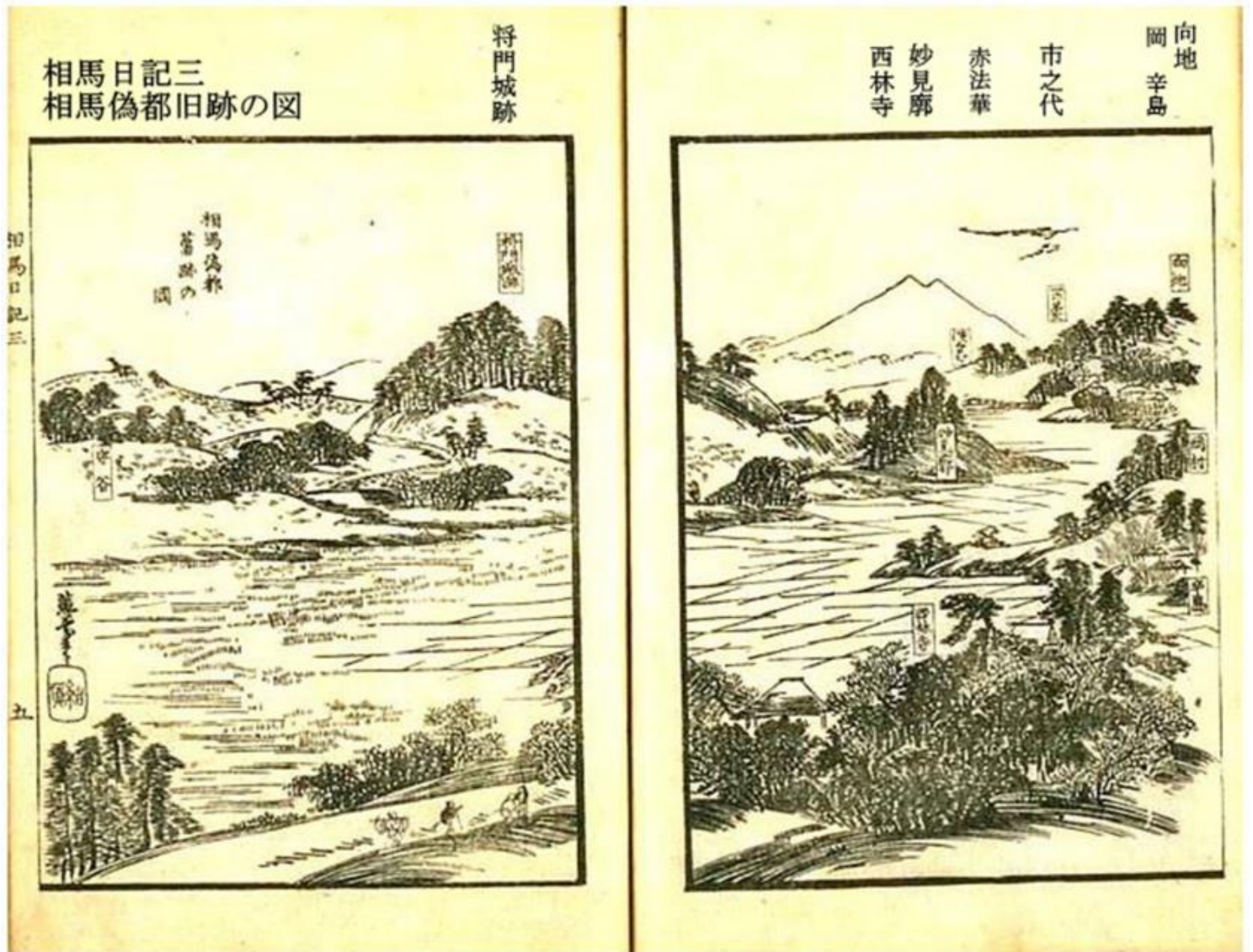
残念なのは、出土品の時期判別が出来ない事です。住居は掘立柱建物9棟、平安時代の竪穴建物3軒と西端の小型建物でした。

重要物件としては、墨書土器6点が出土で市内最多となっています。墨書土器は神仏に係する文字や地名、人名が多く、集落を意味する「庄」と「袋」が2点ずつの他「山本」「三」が書かれていました。これ等の文字の意味は現在不明です。

但し近接する建物跡から「得」文字土器が出土、「得」は仏教に関連することが多く、記載は仏教者と云われているため、甚五郎遺跡は仏教者が活動していた可能性があるらしいのです。

時期不明のため断定できませんが、利用時期がもしも建物跡が墨書土器と同じ平安時代のものであれば、甚五郎遺跡の掘立柱建物は寺院である可能性が推定されます。平安時代の甚五郎崎辺りが中心的所在地であったと云えます。

相馬霊場資料 2022年 11月版

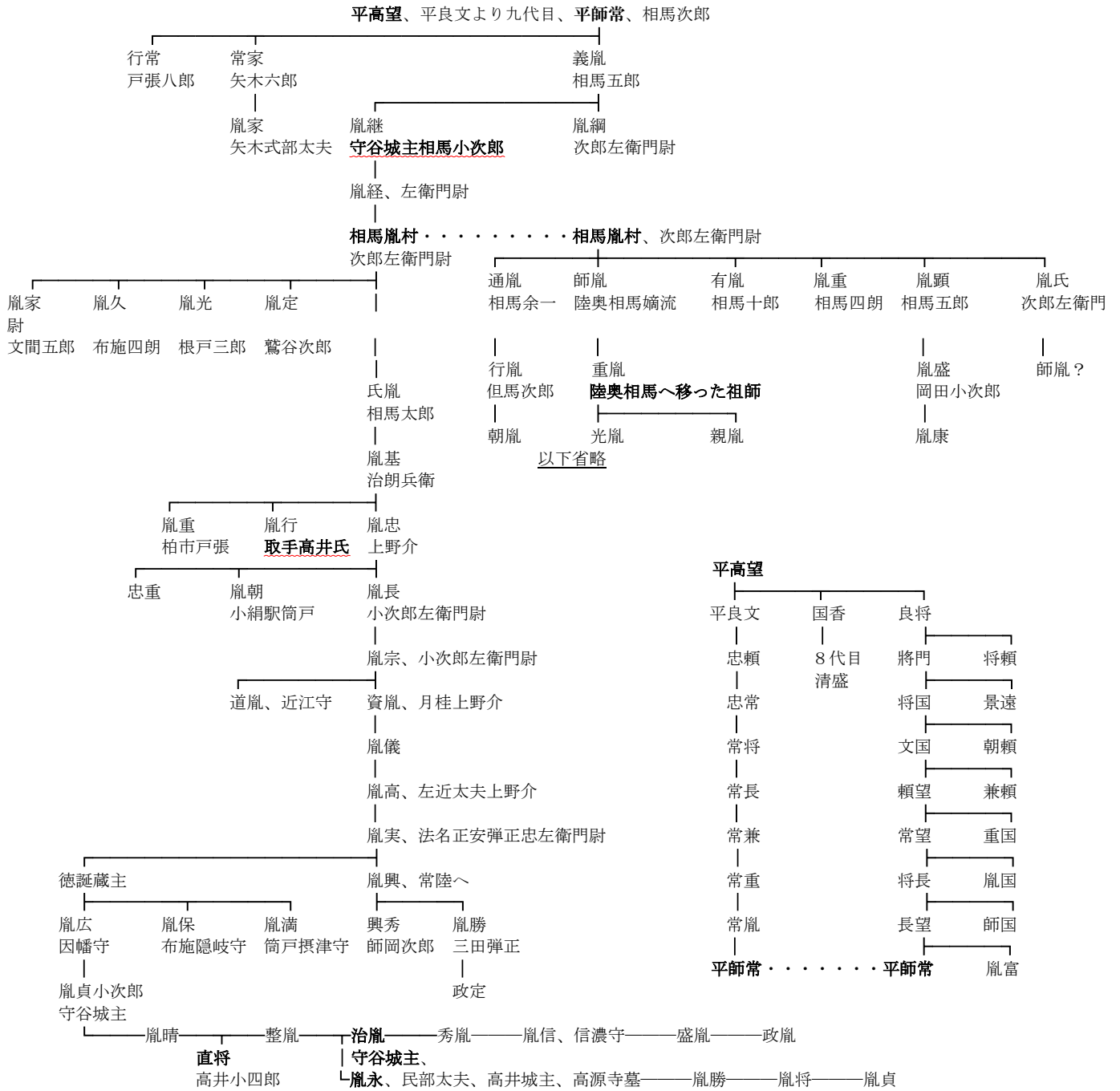


相馬偽都(いと)とは、守谷城は相馬一族の築城で、平将門の城では無く都ではなかったため。

下総相馬氏略系図、

◆ 個人使用に限りますコピー厳禁。

鎌倉時代前期、源頼朝の重臣であった相馬師常の実子胤継により守谷城が築城され胤貞、治胤と受け継がれる。



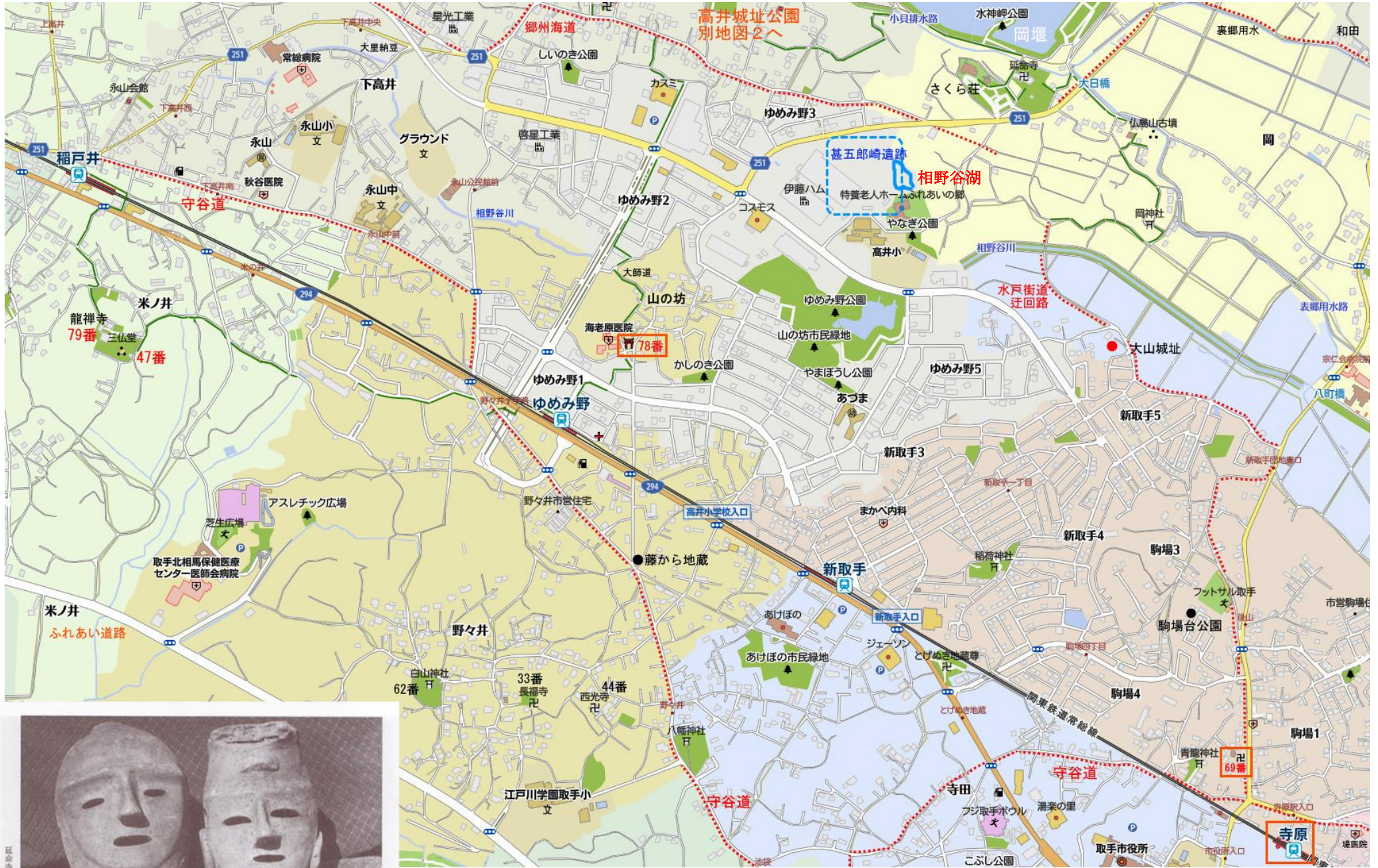
天正 18 年 5 月 守谷城落城。

我孫子市湖北の郷土の歴史研究会資料流用

平將門(延喜 3 年(903)?~天慶 3 年 2 月 14 日(940/3/25)はなぜ常陸国衙(こくが：国の役所)を攻めたのか

天慶 2 年(939)11 月 21 日、平將門 37 歳は常陸国府(現石岡市)を襲撃した。常陸介(ひたちのすけ)藤原維幾(ふじわらのこれちか)を捕縛し、印鑑(いんやく)国印と倉の鍵を得ました、之は国の行政権と財政権を自由にできるということになる重大な事件でした。きっかけは、常陸の住人藤原玄明(はるあき)でした。玄明は常陸介の維幾とひと騒動を起こして將門に庇護を求め、將門は玄明を匿(かくま)いました。維幾は玄明の身柄引き渡しを要求しました、しかし將門はこれを拒否したことで、両者に対立関係が生まれ。さらに、將門の宿敵である平貞盛が維幾のもとに身を寄せていたこともあり、將門は一千余りの兵を率いて常陸国府に向かったのです。

貞盛と維幾の息子、藤原為憲(たへのり)は、およそ三千人の国軍を動員して將門軍迎撃に向かいましたが敗れ、国府は占領、国衙は焼失、貞盛と為憲は逃亡、維幾は捕らわれ、戦いは將門軍の勝利で終わりました。この後、將門は東国の親王と祭り上げられ、下総、常陸、武蔵の民衆から慕われました。



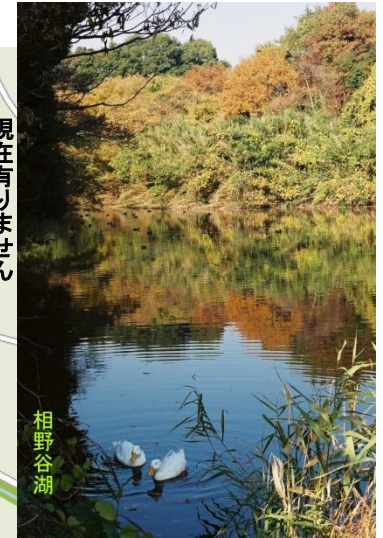
延命寺で出土の埴輪

新四国相馬霊場 88ヶ所巡り、取手西部ゆめみ野コース地図1

新四国相馬霊場 88ヶ所巡り、取手西部ゆめみ野コース地図 2



相馬胤永陵墓



相野谷湖

現在有りません

至岡堰



羯磨(かつま) 金剛、五鈷杵(ごこしよ)を十字に組み合わせた密教での受戒や懺悔(ざんげ)の儀式作法具。
 奈良東大寺戒壇院内陣の広目天は人気の像ですが、その四天王の台座に羯磨が使われています。